

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	東京の印象 : 隨筆
Author(s)	松井, 武州
Citation	龍南, 2 2 4 : 2 5 - 3 2
Issue date	1933-03-02
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7106">http://hdl.handle.net/2298/7106</a>
Right	

# 東京の印象

文二甲二 松 井 武 州

昨年の夏の事である。

インターハイで成城高校とぶつつかつて美事な惨敗を喫して後暫く目黒の親類の家で暮したのだつた。

## 1 言 葉

何度來ても東京言葉は感じがよい。

わけて女の子達の齒切の美しさと語尾に含んだ余韻とはあの汚抜けしたスタイルと一緒になつて僕を桃色の夢境に誘込んで仕舞ふ。

垣根越しに可愛らしい唄拍手が聞えて來る。はたりと止んで、

——ウシロノ鬼サン ダアレ？ ダアレ？

東京の印象

——弓子サアン

——違ヒマアス。

忍び笑と共に再び五六人の合唱が躍り始めた。

——何故泣いてるの？

——イデメツ子がイデメタノ。

——なんでえ——い。泣虫野郎イ。

電柱の蔭からこましやくれた顔をつき出すとぐいと一しやくりしやくつて悪戯兒が二散走りに四ツ角を曲つた。

×

×

×

「なしろ米を食はず生きられる法つてんだらう。」

「ぢやあ、おめえ買つたのかい。」

「十錢玉一つ持つてたのサ。インチキぢやねえか。」

「どうしたい。」

「喰つてやがらあネ、パン食主義たるべしつておめえ……!!」

「ヌケぢやねえか、よくある手だぜ。」

「ぢやあ、おめえも!」

そこで二人の中學生は朗らかに笑ふ。

電車が代官山の墜道をまつしぐらに突抜けて停ると美しい若奥様が乗込んで來た。

合憎空席がない。

「どうぞ。」

「エ、アリガト、濟みません。」

「サア、御遠慮なく。」

打つて變つて取りました中學生は如才がない。それにしても今迄の言葉の下司加減はたとへ流行だとしても……!!  
二人とも身装の良い美少年だつたに。

## 2 ルンペン

市電日比谷終點で降りた。

自動車競走する。電車がよろめく。少女の歩調は輕快な急テンポ。青いプラタナス並木の平行線が美しい日盛りである。僕はあてもなく帝國ホテルの前を過ぎた。

これは又何と云ふ事だ。

偶然取殘された様な支那風の廢邸が通りに面して居る。崩れさうな土塀に樟の古木が茂つて居る。綠芽越しに朱塗の柱が並んで居て、そりかへつた藁に白く埃が被さつて居る。

ルンペンがつくねんと土塀に凭れて蹲んで居た。たるんだ皮膚の半裸体。

オートバイがけたゝましく疾る。

ルンペンの無感覺な視線は微塵も刺戟されない。

拾ふかどうか、と今吸付けた許りのバットを前に落して行過ぎながら振返つたが、身動するのも大儀さうだつた。バ

ツトの煙がむせつぽく流れる。

尖端兒ルンペンの姿が、世紀遅れの土塀を背景に、強く僕の頭の中に飛込んで来るや忽ち、二十世紀の悲壯な名畫が出来上つた。

澄切つた青空高く、悠然と浮かんで居る黄色い廣告輕氣球の光景は、この名畫を更に効果づけて居た。

### 3 商人

住宅地の静かな涼しい朝の間だ。

トホツ！ トホツ！ と掛聲勇しく魚屋の兄イが廻つて来る。

トホツ！トホツ！ドブン〜。

盤臺の下に入れた水が相應じて居る。

腹掛けどんぶりに粹な同鉢巻。しわつた天秤棒がむつちりした白い肩に跳ね上る。

全く意氣と張りで擔いで居る兄イだ。

——生きてやがるんでえ！

一しきり取引が済むと、洗水の音と共に馴れた庖丁の音が、俎板の端で調子よく鳴る。

トントントン〜。

兄イは一分間も無駄目にしないで急いで行く。若々しい黒目を輝やかせて、

トホツ！ トホツ！

×

×

×

本屋の店先で刑事の様に小僧が目を光らせて居る。

——毎度有難うござあーい。

勝鬨をあげながらも、目だけは立讀連中から離さなかつた。

全く一分の隙もない。

×

×

×

その昔は叱られて恐悦した客も居たと云ふ。

むつゝり親爺の名人すし屋が、日本橋のほとりに屋臺を据へて居た。

美人座會館の赤い裝飾電燈が、彼の横顔に點滅して居る。

むつゝりと手巾を器用にさばく親爺の影が、河面にヒョロ／＼くだけて居る。見透された幽霊の様に。

#### 4 賭 け 事

代官山分譲地を散歩して居たら、散在して居る赤松の古木の蔭に、上品な少女が二人居た。白地に赤線のは入った揃ひの袖無セーラー服。

二人は腕を組合せて足取り輕るく近寄つて來た。

「失禮ですけれど。」

「はあ。」

「五高のバスケットの方ぢやござぬません?」

「はあ?」

僕は試合に負けたのが残念になった。

——ごんなさい、あたつたでせう。

一人の方が勝誇つた様に相手をやりこめた。

呆然と見送る僕の瞳に、振返りざまチヨイと投げたウインクがこびりついた。

お嬢さんの様な女給、女給の様なお嬢さん。

僕は朗らかだか憂鬱だか分らない氣持を抱へて歩き始めた。

×

×

×

何たる態だ！

何はさてをき身装を整へて、或は裕福さうに、或はプロ闘士風に、膺揚に街から街へ遊歩して居る青年達。埃りつばい戀を心ひそかに賭けながら斷へ間ない自己満悦に凡ゆる事を忘れて居る。

## 5 同 郷 人

殘金五圓餘りを銀座裏のシックな酒場で費ひ果して、陶然となつて省線の終電車をえびす驛で降りたら一人の女給が足早やに追越して行つた。サインカーブの千鳥足で構内からよろめき出た時、

「あんた福岡ぢやない？」

と今の女給が呼び止めた。

「あゝ、なんだい。」

「私も福岡なの。」

「ほう。」

女給は東京には見當らぬ僕の太緒の杉下駄を指さした。

「何だか懐しいわねえ。」

「さうだなあ。」

二人は歩き始めた。

代官山のアバアトに居る。福岡にも歸りたいけれど、と口籠つてK女學校の出身だと附加へた。そうして朗らかに笑つて居た。淋しさうにもない笑聲は、僕の酔心地を少しも亂さなかつた。打解けさせた。

福岡の話はよく合つた。アバアトへ登る坂の下で別れる時は全く仲好になつて居た。

「何日迄居るの？」

「明朝歸へるよ。」

「何時来る？」

「分らん。」

「よろしく。」

「誰れにサ。」

「福岡君に。」

女給は微笑と共に二本指の失敬をやつて踵をかわした。

「オイ贈物だ。」

僕は新しい杉下駄を即座にぬいで授やつた。



無言の一瞬。

女給の顔にさつと哀愁の表情が走り過ぎた。

「有難う、有難う！」

拾ひ上げた下駄を、高く打振り打振り坂を馳上つて行つた。

冷たい舗道の肌を足裏に感じながら、再びサインカーブを描いて行く僕の頭の中で、女給の顔が歪んだ笑をやつて居た。

翌朝の急行で東京を去つた。

何時もの事だが國府津邊迄の車窓の風景は東京の印象に深い愛着を起させないでは居ない。